

分婉見学の学びの分析

Analysis of the Students' Reports on Child Delivery Observation

本多 洋子

要 約

母性看護学実習では、分婉見学をなるべく体験できるようにしている。分婉や生命の誕生の瞬間を学生がどう捉えているだろうか。分婉の見学体験のレポートをKJ法により分析したところ、分婉見学を殆どの学生は肯定的にとらえていた。そうでなかった学生も見学を終了したときには肯定的な受け取りになっていた。分婉見学が肯定的に捉えられた要因として、分婉に前向きに臨む産婦と、出産を共に待ち望む家族の支援、産婦の苦痛を適確に判断しケアする助産師と教員の助言であった。この体験をとおして学生は、分婉に関する知識と実際を統合し、母性看護観をもつことができた。

キーワード：母性看護学実習，学生，分婉見学，教員，指導

はじめに

平成18年における出生率はその低下によりやく歯止めがかかったかと思われる状況であるが、低いことには変わらず、街で妊婦の姿を見かけることは少なく、こどもを持つ家族や、こどもを持つとする家族にとって子育てを身近に学ぶ機会は少ない。出産により初めてこどもに接する母親をはじめとする家族へ、妊娠中からの子育てにかかわる技術の指導や考え方などを指導する看護の役割は重要である。

母性看護を学ぼうとする看護学生（以下学生とする）においても、これまで妊産婦はもちろん、小さいこどもに接する機会は殆どないということは同様である。まして、出産というものがどういうものかといことについてビデオなどで学習はしていても現実的にとらえられていない。

本学の母性看護学実習（以下、母性実習とする）においては、妊娠・分婉・産褥・新生児について、実際に受け持って援助をさせていただく。その体験の中で、知識と実際を統合し、援助の考え方を理解することにしており、分婉の見学もその一つである。

分婉の見学では、分婉がどのようなものであるかを理解し、分婉に望む産婦や家族の気持ちを知り、看護のあり方を学んでほしいと考えている。

また、生命誕生の瞬間に立ち会うことにより、生

命に対する畏敬の念を持ってほしいこと、分婉を自分自身の将来としてとらえ、健全な母性観・父性観を持ってほしいと考えている。

花沢¹⁾は、従来から使われてきた母性愛をこどもに対する感情としてとらえ、「対児感情」とし、幼小児期からのこどもとの接触体験が対児感情に影響すると述べている。

きょうだいの少ないわが国では近所のこどもを集めて遊ぶ経験が少なく、母性実習で初めて新生児に触れる学生が多い。学生にとって、産婦が陣痛を乗り越え、出産し、新生児を抱き上げる姿に接することは学生の対児感情に肯定的に影響するであろうか。

鈴木²⁾は、分婉見学実習により学生の分婉に対するイメージがよいイメージに変化し、いつか自分もこどもを産み育ててみたいと思うものが増えていると述べている。

学生は、ビデオで分婉を視聴しており、陣痛に耐え児を出産する姿に感動している。なかには見たくなかたつたと言う学生もある。母性実習での分婉見学とビデオ視聴ではどのように印象が異なるのだろうか。また、新生児の生まれる瞬間は、生命に対する畏敬の念を抱くのによい機会となるだろうか。

前原³⁾は、「母性看護学実習において看護学生の母性意識を発達させる教員や臨床指導者の関わり」で、分婉第1期から関わりが大切であることを挙げてい

る。

本学の母性看護学実習は4病院で行っており、夏休みまでの前期にA・Bの2病院で10グループ、夏休み後の後期にはC・Dの2病院分娩で9グループ実習を行っている。今回は前期に実習し、分娩が見学できた学生を対象にしているが、2病院のうち1病院は分娩件数がすくなく、1病院だけしか見学できなかった。その実習病院は自然分娩の方法をとっていることから夜間に分娩が多く、なかなか見学ができない状況であり、分娩第1期から関わりたいと考えているが、分娩第1期の終わり、出産直前からの見学も多い。

そのような制限があるものの、見学ができた学生の学びはどんなものであったのかを知ることは、今後の実習指導に役立つと思われる。

そこで、本研究では、本学の学生は分娩見学により分娩をどのように受け止めているのか、また、その要因は何かを明らかにすることにより、実習指導の一助とする。

研究目的

1. 分娩見学のレポートを分析により、学生の分娩に対する受け止めとその要因を明らかにする。
2. 分娩見学により分娩が肯定的に受け止められるための指導について考える。

用語の操作的定義

1. 分娩見学

分娩見学：分娩の過程を、助産師または教員の指導のもとに、産婦や新生児の観察や援助を行いながら、見学することとする。

研究方法

1. 方法

学生のレポートを、KJ法⁴⁾により、分娩見学の受け止めとその要因を抽出する。

2. 対象

本学で、前期に母性看護学実習を終了した3年生50名の学生で、分娩を見学した15名の学生のうち、研究に同意を得られた13名である。このうち、男子学生は3名である。

3. 期間

2005年4月18日～9月14日

4. 倫理的配慮

レポートの分析は、個人を特定するものではなく、全体として分析すること、実習の評価には関係がな

く、今後の実習指導に役立てるものであることを、文書および口頭で説明し、同意を得た。

結果

(1) レポートの分析

レポートの文章を、その内容の意味を読み取り、一つの事を一つのカードに表した。カードにする際の読み取りについては、同じ母性看護学を担当する教員の協力を得た。

カードの数は1人19から93で、全部で557であった。そのカードを同じ内容と思われるものにグループ化しラベルをつけ、さらにグループ化し最終的に9個のラベルとなった。

9個のラベルは、①産婦の努力、②家族の支持、③新生児、④助産婦のケア、⑤教員の助言、⑥学生の援助、⑦分娩経過の理解、⑧知識と実際の統合、⑨母性看護観である。

9個のラベルに含まれる内容については以下のとおりである。

①「産婦の努力」

産婦の努力に含まれる下位のラベルには、「分娩に向かうのはつらい」、「産婦はつらくとも頑張っている」、「母親になった喜び」があった。

「分娩に向かうのはつらい」のラベルに含まれる下位のラベルは、陣痛は痛く苦しい、不安と苦痛、分娩に臨む産婦には不安がみられる、産婦には余裕がない、息んだりしてもやっぱりつらい、陣痛の間にも近づく苦痛、息んだり呼吸法もしてもやっぱりつらいであった。

「産婦はつらくとも頑張っている」のラベルに含まれる下位のラベルは、呼吸法を一生懸命おこなっている、懸命に息んだりし、つらくともがんばるという産婦の気持と努力を感じたであった。

「母親になった喜び」のラベルに含まれる下位のラベルは、元気な赤ちゃんが生まれた、出産した瞬間に母親になった、赤ちゃんかわいい、とても幸せそう、母親になった喜び、もう母親、母親になった強さ、母性愛であった。

②家族の支援

家族の支援はこのラベルのみであり、5枚のカードがあった。それには、家族も待っている、家族も不安そう、産婦にとって家族がいると安心、家族の存在は大きい、児の出産により家族は安堵、産婦をねぎらう家族のカードがあった。

③新生児

このラベルに含まれる下位のラベルは、「赤ちゃんもがんばっている」、「元気な赤ちゃんが生まれた」、「児の生命力を感じた」であった。

④助産師のケア

助産師のケアのラベルに含まれる下位のラベルは、「助産師の適確なケア」、「助産師のケアは産婦の支え」、「助産師のケアは安心感を与える」、「分娩に向かう力をつける」であった。

⑤教員の助言

これはこの一つのラベルのみであった。このラベルには2枚のカードがあり、教員の指導・助言で産婦の観察を行ったこと、産婦に楽な姿勢をとってもいいと助言をしたことがあった。

⑥学生の援助

これには、「がんばります」「事前学習」「分娩に向かうのはつらそう」、「学生なりに頑張っただけ援助できた」「ホッとした」、「何をしてもよいかわからない」、「心残り」、「分娩は受け入れがたい」のラベルがあったが、「分娩は受け入れがたい」には下位のラベルはなかった。

「がんばります」のラベルに含まれる下位のラベルは、分娩に立ち会うのは初めての経験、分娩は恐いイメージがあった、初めての分娩体験でドキドキ、がんばりたいがあった。

「事前学習」のラベルに含まれる下位のラベルは、呼吸法やマッサージの練習、ビデオ学習をしていた、参考書を産婦の経過をみながら学習したであった。

「分娩に向かうのはつらそう」のラベルに含まれる下位のラベルは、痛そう、辛そう、産婦の痛みが伝わってくる、分娩は体力を消耗するもの、こんなに大変なのかであった。

「学生も頑張っただけ援助できた」のラベルに含まれる下位のラベルは、産婦と同じ気持ちになり呼吸法を一緒に行った、腰の圧迫やマッサージを行った、援助が何とかできたであった。

「何をしてもよいかわからない」のラベルに含まれる下位のラベルは、どうしたらよいかわからない、うまくできない、残念、できない自分もどかしい、無力な自分であった。

「心残り」のラベルに含まれる下位のラベルは、気分が悪くなり申し訳ない、学生が不安を与えたのではないかと、心残りであった。

「分娩見学は受け入れがたい」には2枚のカードがあり、分娩は感動というよりグロさを感じた、立会い分娩はしたくないであった。

⑦分娩経過の理解

これには、「分娩各期の理解」、「分娩期の異常と処置」、「なかなか生まれない」、「余裕があった」、「分娩終了後の産婦は普通なのに驚き」のラベルがあったが、「分娩終了後の産婦は普通なのに驚き」は一つのラベルのみであった。

「分娩各期の理解」のラベルに含まれる下位のラベルは、産婦の情報、入院時までの状況、分娩期の観察、発作時と間歇時の違い、破水の迫力、分娩第1期・3期、子宮口の全開大、会陰切開の縫合が終了、分娩経過に伴う産婦の変化であった。

「なかなか生まれない」のラベルに含まれる下位のラベルは、全然生まれそうにない、まだ生まれていなかったであった。

「余裕があった」のラベルに含まれる下位のラベルは、経産婦は落ち着いていた、分娩はスムーズであった、思ったよりスムーズであった、まだ余裕があったであった。

「分娩終了後の産婦が普通なのに驚き」は、この1枚のカードのみであった。

⑧母性看護観

これには、「生命誕生への感動と畏敬」「産婦に感謝」、「母親に感謝」、「こんなお産がしたい」、「こんなケアがしたい」、「状況に応じた判断とケア」、「新しい価値観」、「女性に生まれてよかった」、「男性助産師の可能性」であった。

「生命誕生の感動と畏敬」、「産婦に感謝」以外は一つのラベルであった。

「生命誕生の感動と畏敬」のラベルに含まれる下位のラベルは、生命誕生の神秘を肌で感じた、生命誕生に感動、生命の誕生に畏敬、であった。

「産婦に感謝」のラベルに含まれる下位のラベルは、分娩見学を受け入れてくれたことに感謝、産婦の分娩に臨む姿勢に感動、学生にありがとうといってくれたであった。

「母親に感謝」は5枚のカードがあり、分娩見学により、自分の母親を重ね合わせ、このような苦しい思いをして産んでくれたことの感謝であった。

「こんなお産がしたい」には3枚のカードがあり、いつか自分も出産をしようと思っていること、立会い分娩をしようと思っていることであった。

「こんなケアがしたい」には5枚のカードがあり、個別性に応じた看護、呼吸法や声かけなどにより安心させるケア、経過を理解し判断できることなどであった。

「母性看護の役割の学び」は5枚のカードで、今回の経験を生かして生きたいこと、母性看護には経験と知識が必要であった。「状況に応じた看護」には5枚のカードで、呼吸法や声かけの指導、誘導する必要性、水分補給など分娩や産婦の状況に応じたケアの必要性であった。

「新しい価値観」には4枚のカードで、分娩体験がよい体験であったこと、さらに新たに学んでいくこと、分娩の印象が肯定的になったことなどであった。

「女性に生まれてよかった」は2枚のカードで、分娩の素晴らしさと、女性は出産できるであった。

「男性助産師の可能性」は2枚のカードで、今は男性には資格取得ができない、男性にも資格取得ができれば取得したいであった。

学生の学びの要因を知るために9個のラベルについて関係性を考え、図解した(図1)ところ、以下のことが説明できた。

産婦は、家族の存在を心強く感じ、つらい分娩期をがんばり母となった喜びを感じている。

学生は、教員や助産婦の指導・助言により見学実習を行う。初めての分娩見学に緊張し、見学を受け入れてくれた産婦のためにがんばりたいと思う。事前学習や助言、助産婦のケアを見ながら学生なりに援助を行う。産婦の分娩に向かう姿はつらそうで、何か援助をしたいと思い、学生なりにがんばって援助ができた。無事出産できるとホッと、すでに母親の顔になって新生児に接している姿に母性愛を感じる。つらそうな産婦に何か援助したいと思うが、何をしてよいかわからず、分娩が終了するとういうことができたのではないか、学生がついているこ

とでかえって産婦を不安にさせたのではないかと心残りがある。中には、ビデオの時から分娩にグロテスクさを感じ、分娩を見学するのは受け入れがたいと感じた学生もあった。

しかし、学生なりにがんばって援助ができた学生も、何をしてよいかわからず、心残りを感じた学生も、分娩は受け入れがたいと感じた学生も、分娩見学が終了した後は、分娩を見学してよかったと、産婦に感謝した。その関わりから、今度はこんなケアがしたい、母性看護は状況に応じた判断とケアが必要だという母性看護の学びがあった。自分の母親もこうやって自分を生んでくれたのだと感謝し、自分もこんなお産をしたいと思った。分娩はグロテスクだと思った学生も、結局分娩見学もいいものだとして新しい価値観をもつことができ、それぞれがじぶんなりの母性看護観を築くことができた。

この分娩見学をとおして、分娩各期の理解、分娩期の異常と処置について知ることによって分娩を理解し、これまで学んできた知識と実際を統合することができた。

考 察

(1) 学びの要因

学生は、母親の新生児に対する姿から肯定的な対児感情を持つことができ、分娩にもいいイメージを持つことができ、見学をとおして分娩経過を理解し、知識と実際を統合し、学生なりの母性看護観を築くことができたと考えられる。

このような学びができた要因としては、産婦の分娩に臨む姿から、陣痛はつらいものと思われるが、

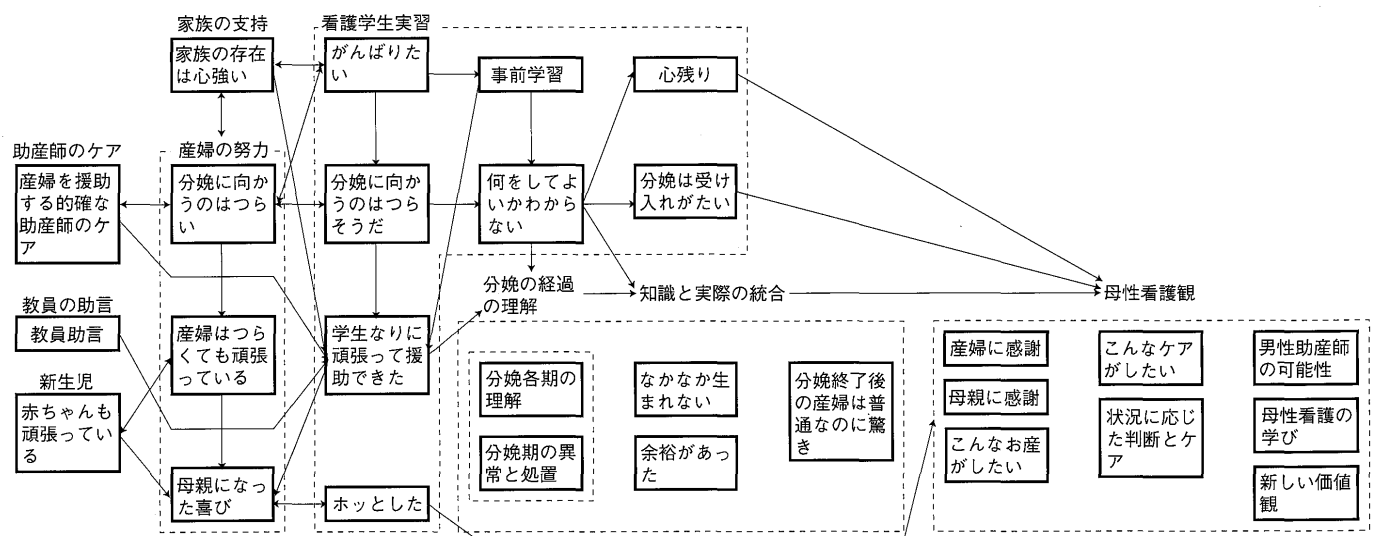


図1 分娩見学の学び

無事に元気な赤ちゃんを産もうとがんばる産婦の姿をそばで見学できたことである。分娩直前の見学でもそれを感じることはできるが、やはりそばについて呼吸法やマッサージなどを拙くではあるが行ったことで、学生もともに陣痛のつらさを乗り越えようとするところができる体験によりそれは感じられると思われる。そのため、状況の許す限り分娩第1期から見学できることが望ましい。

たいていの看護学生は青年期にある。この時期は異性に興味があるが、まだ相手を美化している。分娩は性と生殖のなまなましい現実と接する場である。分娩をグロテスクと感じるのも無理はない。これを否定せず、学生の状況を見ながらできるだけ分娩に誘導する。そして必死にがんばって出産している産婦の姿とそれを支援する家族に気づかせる。そのことにより、分娩は局所のものでなく、全体として感じられるように持っていくことが必要である。そのことは、分娩前や分娩時の感情は否定的や回避的であっても分娩見学を振り返ることにより肯定的感情と変化したということからいえる。

(2) 実習指導について

助産師のケアについて「助産師の適確なケア」、「助産師のケアは産婦の支え」、「助産師のケアは安心感を与える」、「分娩に向かう力をつける」のラベルがあり、教員についても「教員の助言」というラベルがあった。助産師や教員の産婦に対するケアが、産婦の支えとなり、安心して分娩に向かう力になったと感じている。

このような、産婦を援助する助産師の的確な判断とケアが見学できるよう配慮すること、教員も看護者として産婦に学生とともにケアを行うことが学生が肯定的に受け止める要因と考えられる。

講義で伝えていることを臨床の場で実践してみせること、迷っている学生にケアを指導するが臨床の場では求められる。そのためには、病院の助産師が産婦にケアしている姿をありのままに受け止められるようにするためには教員と臨床との良好な関係づくりが必要であると思われる。また、教員の看護実践力も必要とされる。

結 論

- 1, 分娩見学体験は、分娩を肯定的に感じられる体験であり、その内容は、分娩に前向きに取り組む産婦とそれを支援する家族の姿であり、生まれ出た新生児への母性愛、生命誕生の感動である。
- 2, 分娩に前向きに向かう産婦をケアする助産師の姿は、学生の母性看護観に影響した。
- 3, 分娩見学体験が肯定的に受け止められるには、産婦の姿勢や助産師のケアを見学できる分娩第1期からの見学が望ましい。
- 4, 教員には看護実践力、実習上との調整力が必要である。

引用文献

- 1) 花沢成一：母性心理学. 医学書院（東京），61-91, 1992.
- 2) 鈴木樹里：分娩見学が看護学生の分娩に対するイメージに与える影響. 神戸市看護大学紀要, 23:95-100, 2004.
- 3) 前原信子：母性看護学実習における看護学生の母性意識の発達を促すための教員や臨床指導者の関わり. 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録, 28:160-166, 2003.
- 4) 川喜田二郎：KJ法. 中央公論社（東京），1986.
- 5) 中西睦子：臨床教育論—体験からことばへ. ゆみ出版（東京），288, 1983.
- 6) 植村裕子：生命の誕生に立ち会った看護学生の学び. 日本看護学会論文集 看護総合, 36:508-510, 2005.
- 7) 大日向雅美：母性の研究. 川嶋書店（東京），1988.

Analysis of the Students' Reports on Child Delivery Observation

Yoko Honda

Abstract

In maternity nursing practice, we are offering students with opportunities to observe child deliveries as much as possible. How do students perceive child delivery and the moment of birth of new life?

Students' reports on child delivery observations were analyzed using the KJ method. From the analysis, it is found that most students captured child delivery positively and even the students, who did not, could perceive it positively at the end of the observation.

The factors that promoted students' positive perception toward child delivery are as follows; involving with laboring women who actively underwent child labor, seeing the midwives who closely monitor the labor condition to make right pain assessment and to provide appropriate care for laboring women and their families who are attending the delivery. Through this experience, the students could acquire both views of maternity and maternity nursing.

Keywords: Maternity nursing practice, Student, Midwifery, Child delivery